

第4編

# 第1章

## 附属図書館



## 第1節 歩みと現況

### 第1項 図書館の発足

熊本大学附属図書館は、1949（昭和24）年5月31日の熊本大学設置に伴い、熊本医科大学、第五高等学校、熊本師範学校男子部・女子部、熊本青年師範学校、熊本薬学専門学校及び熊本工業専門学校の各附属図書館（室）を統合して発足した。

大学の発足とともに、法文学部と理学部が2年間の教養課程を担当することになり、そのためには学生が共通に閲覧できる総合図書館の設置が必要であった。そこで、第五高等学校以来の図書課長であった松本雅明助教授（法文学部）は、当時の各図書館長と諮り、総合図書館設置の重要性を力説し、大学発足当初に「図書館長・図書課長協議委員会」を結成した。委員会では会議を重ねるうち、その必要性を痛感するようになったが、各学部ではそれぞれ図書館があり、館長又は課長・職員がいるので現状で良しとし、図書館全体についての理解はほとんど示されなかった。そこで、旧制第五高等学校の図書館を中央館として学生に開放し、各旧学制の図書館を分館として存続させる方針が決定された。これにより、中央館としての機能は旧制第五高等学校の図書館が果たすことになった。また、人事面においても、このような構想に基づき、全学的見地から発令が行われ、1949（昭和24）年7月1日に倉岡堯昌氏が事務長に任命され、同日付で庶務係長、司書係長、教育学部・医学部・薬学部及び工学部の各分館係長が任命された。次いで1950（昭和25）年2月21日に初代附属図書館長に原田敏明教授（法文学部）が任命され、また、医学部分館長は1949（昭和24）年7月31日に、教育学部、薬学部及び工学部の各分館長は1950（昭和25）年6月26日に発令されて、図書館全館の機構が整えられた。このように大学発足当時から既に現在のような全学的見地からの機構が制定されていたが、規則上は、1950（昭和25）年3月22日協議委員会議決による「熊本大学附属図書館機構」が初めである。これを受けて同年6月15日に「熊本大学附属図書館規程」が制定された。第一章総則、第二章機構、第三章事務分掌、第四章図書管理（閲覧規程）により構成されており、現在の図書館諸規程の根源をなすものである。この規程には「図書館評議会」及び「図書館委員会」の設置が定められており、分館は教育学部・医学部・薬学部・工学部に置くと規定されていた。ただし、当時の各分館係長は学部兼務で発令されており、また、図書館運営費の学内負担分等からみても、制度の面ではなお流動的であった。

発足時の施設は、中央館が黒髪北、工学部分館が黒髪南、医学部分館が本荘、薬学部分館が大江の各地区に所在し、教育学部分館は京町と内坪井町にあり、それぞれで管理運営を行っていた。

なお、発足当時1949（昭和24）年の蔵書は193,588冊である。

## 第2項 機構の変遷

新学制のもとに発足した図書館の機構は、制度的には、「熊本大学附属図書館規程」の制定に始まるが、附属図書館の編成を中央館及び分館とし、それぞれの機能と運営とを全学的立場から設定しようとするいわゆる近代化図書館構想の端緒が本学附属図書館の発足時に見られるのは、当時新学制下での図書館行政として文部省が意図したものである（松本法文学部教授、原田初代図書館長談）。文部省は2年後の1951（昭和26）年にこのような基本政策と関連して、「国立大学図書館改善研究会」を正式に発足させている。

先述の熊本大学附属図書館規程による管理運営組織は図1の通りである。

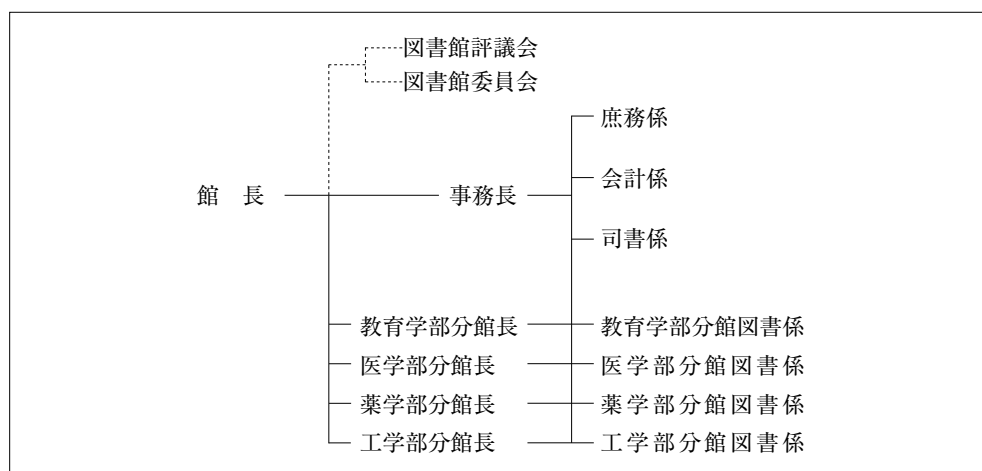


図1 発足時の附属図書館の管理運営組織

「図書館評議会」は、学長、図書館長、各学部長、事務局長、学生部長、教養部主事、附属病院長及び研究所長をもって構成され、図書館の運営に関する重要事項を審議することとなっている。

「図書館委員会」は、館長、分館長、委員（分館のない学部、教養部より各1名）及び幹事（文科系、理科系各1名）をもって構成され、図書館と各学部との緊密な連絡と図書館運営に関する事項を審議することとなっている。このように組織機構そのものは、現行のものと大差なく、全国に先んじて中央館システムが採用されたことは、本学の附属図書館の特色であろう。

以降の組織の主な変遷は表1の通りである。

表1 附属図書館組織の変遷

年 月	事 項
1954年9月	附属図書館規程の改正により、庶務係・会計係・司書係をそれぞれ管理係・整理係・運用係に変更
1960年2月	附属図書館規程の改正により、新たに「附属図書館協議会規則」「附属図書館長選考規則」「附属図書館事務分掌規則」「附属図書館資料閲覧規則」を施行

年 月	事 項
1960年 5 月	「附属図書館委員会規則」を施行
1960年 6 月	教育学部分館の中央館併合に伴い新たに参考係を設置
1963年 5 月	管理係を総務係に改称、整理係を受入係と目録係に、医学部分館図書係を整理係と運用係にそれぞれ分離
1979年 4 月	事務組織が全面的に改組され、事務長制を事務部長制に改組。整理課（総務係・受入係・目録係）及び閲覧課（閲覧係・参考係・学術雑誌係）を設置。なお、工学部分室図書係の業務は整理課又は閲覧課の関係の係でそれぞれ分担、分室図書係は閲覧課学術雑誌係に改組
1984年 1 月	閲覧課に専門員を新設
1988年 4 月	整理課を情報管理課、閲覧課を情報サービス課に変更
1991年 4 月	「附属図書館資料閲覧規則」を廃止。「附属図書館利用規則」「附属図書館利用細則」「附属図書館貴重書及び特殊文庫資料利用規則」「附属図書館貴重資料指定基準」及び「附属図書館一般市民等利用要項」を施行
1992年 3 月	工学部分室の業務を中央館に統合
1997年 4 月	情報管理課に総務係・図書情報係・雑誌情報係・電子情報係・情報サービス課に専門員・資料サービス係・電子サービス係・相互利用サービス係・医学情報サービス係・薬学情報サービス係を設置
1998年 4 月	「附属図書館協議会規則」「附属図書館委員会規則」を廃止、また、「附属図書館利用規則」を一部改正し、「附属図書館運営委員会規則」を施行
2000年 4 月	「附属図書館利用細則」を一部改正
2004年 4 月	学術研究協力部長のもと、学術情報課に学術情報企画係・図書情報係・雑誌情報係・電子情報係・図書館サービス課に副課長・資料サービス係・電子サービス係・相互利用サービス係・医学情報サービス係・薬学情報サービス係を設置
2006年 7 月	1 課に改組され、学術情報総主幹のもと、図書課に副課長（総務管理担当）・副課長（サービス担当）・総務担当・図書担当・雑誌担当・電子情報担当・閲覧担当・利用相談担当・相互協力担当・医学系分館担当・薬学部分館担当を設置
2008年 4 月	学術情報部長のもと、図書課に副課長（総務管理担当）・副課長（サービス担当）・総務担当・図書担当・雑誌担当・利用サービス担当・電子情報担当・利用相談担当・医学系分館担当・薬学部分館担当を設置

### 第 3 項 施設・設備の変遷

大学発足当時の附属図書館は、先述の通り中央館が旧制第五高等学校を、各分館が各旧学制の図書館を引き継いで構成されており、各館の延べ面積は、中央館が $641.34\text{m}^2$ 、教育学部分館が $432.90\text{m}^2$ （京町）及び $183.15\text{m}^2$ （内坪井町）、医学部分館が $995.67\text{m}^2$ 、薬学部分館が $379.62\text{m}^2$ 、工学部分館が $529.47\text{m}^2$ となっている。

このうち教育学部分館は、教育学部の黒髪北地区への移転に伴い、1960（昭和35）年6月京町と内坪井町にそれぞれあった施設を中央館に統合した。また、工学部分館は、同年の規則改正により工学部分室と改称し、更に1992（平成4）年3月中央館に統合された。現在は、黒髪北地区に中央館、本荘地区に医学系分館、大江地区に薬学部分館を配置し、

中央館で管理業務を一括集中して行い、各分館はサービス業務を中心とした運用を行っている。各館の変遷については以下に示す通りである。

## 1 中央館

附属図書館中央館は、旧制第五高等学校図書館の蔵書・施設・設備を受け継ぎ発足したが、昭和30年代に入ると、その蔵書数は発足当時より約2.2万冊増加、更に雑誌等も大幅に増加し、書庫・閲覧室等が狭隘状態となった。1957（昭和32）年2月に熊本大学期成会の寄附により竣工した鉄筋3階建ての新館（第1期工事、管理・閲覧スペース1,201㎡）へ同年4月に移転し、1961（昭和36）年8月には、同じく期成会の寄附により書庫（第2期工事、5層、1,287㎡）が完成し運用を開始した。しかし、その後の増築計画は、予定地の旧制五高の建物が国の重要文化財に指定されたため、当初の計画の4分の3を残し中断することになった。

それから10年の時を経て、1972（昭和47）年3月に現在地に附属図書館が新営されることになり、1973（昭和48）年1月に竣工、同年4月にオープンした。建面積1,837㎡、延べ面積6,264㎡、鉄筋造地下1階・地上2階の構造を持ち、地下1階書庫は1層のみであったが、1976（昭和51）年に積層書架が整備され書庫第2層836㎡が利用できるようになった。なお書庫1層、2層とも一部を仕切り、貴重書庫として古文書等の貴重資料を収蔵している。

旧館については、管理・閲覧スペースを教養部の研究室に改修し、書庫5層は各研究室等の返却図書や各旧学制時代の資料の保存書庫として現在も使用している。

2006（平成18）年4月熊本大学附属図書館南棟・放送大学熊本学習センター合築棟（地下1階・地上3階）が竣工し、1階595㎡と地下1階569㎡を積層2層として、図書館が使用している。

## 2 医学系分館

2004（平成16）年12月に医学部分館から改称した医学系分館は、熊本医科大学附属図書館（現在の山崎記念館）からの移行で、発足時は本荘北地区（病院地区）にあった。1961（昭和36）年3月に本荘中地区の医学部管理棟（当時）2階の一部へと移転して延べ面積は1,436㎡となり、1969（昭和44）年3月には書庫積層3階を6層へ、1976（昭和51）年3月には増改築も行われている。1998（平成10）年9月に本荘地区再開発の影響で積層書庫が取り壊された際に書庫の資料は同じ建物の3～4階に仮配架されていたが、2009（平成21）年3月に新築なった医学教育図書棟へ移転し現在に至っている。医学教育図書棟は本荘北地区（病院地区）にあり、医学系分館はそのうち地下1階から地上2階まで、延べ面積2,440㎡、座席数



写真1 現在の医学系分館

210席、PC席32席である。書庫には電動集密書架を導入し、図書館資料の収容能力強化を図っているが、研究室からの返却資料は増加の一途であり、今後より効率的な資料配置が大きな課題となっている。

### 3 薬学部分館

発足時熊本薬学専門学校附属図書室より移行したが、1966(昭和41)年8月薬学部事務棟を改築し、閲覧室(79㎡)・事務室(40㎡)が移転している。更に1970(昭和45)年4月には薬学部の研究棟に併設の形で1階に書庫(196㎡)、2階に事務室(19㎡)と閲覧室(155㎡)が新築・移転している。その後1987(昭和62)年4月に現在の大学院研究棟の1階・2階部分として新築・移転し今日に至っている。



写真2 現在の薬学部分館

## 第2節 図書館の活動

### 第1項 図書館の業務

#### 1 資料の受入業務

中央館における図書・雑誌の受入手続は、発足当時に会計係、更に整理係と引き継がれた。受入業務は係の中ではかの図書館業務と兼ねて扱われてきたが、1963(昭和38)年に受入係を設置し専任とした。1979(昭和54)年に学術雑誌係を設置し、雑誌受入を開始した。その後、業務の簡素化・効率化を図り、1997(平成9)年に受入係と目録係を統合し図書情報係に、学術雑誌係を雑誌情報係に変更し、それぞれ図書・雑誌の受入を行うこととした。そして、2006(平成18)年7月に図書担当及び雑誌担当に名称変更を行い現在に至っている。

#### 2 目録業務

図書の分類は、1954(昭和29)年より「日本十進分類法」第6版が採用され、現在は第9版を採用している。また、和書目録は「日本目録規則」、洋書目録は「英米目録規則(AACR)」を採用している。1954年以前に所蔵した図書は、旧分類をそのまま採用している。

図書の検索は、図書目録カードを作成し中央館に全学蔵書目録を整備した。分館で所蔵している図書も、中央館に目録カードを入れ込み、蔵書目録の全学的な整備に力を注いだ。

雑誌の検索は、印刷目録として「熊本大学学術雑誌総合目録和文・欧文篇」を1955（昭和30）年に発行し、以来「和文篇」「欧文篇」に分冊して数年ごとに改定を行った。

上述の図書目録カード及び印刷目録は、後の業務電算化により廃止され、現在はオンライン検索である熊本大学蔵書検索OPAC（Online Public Access Catalog）へ移行した。

目録業務は、受入業務が専任の係となった期間のみ、目録業務専任の目録係が担当した。この期間以外は、受入業務と同じ係が担当し現在に至っている。

### 3 図書の閲覧・貸出

図書の閲覧・貸出は、図書館の基本サービスであるため、発足当初の1949（昭和24）年9月に「熊本大学附属図書館閲覧貸出仮規定」が定められた。1951（昭和26）年12月の改正を経て、正式に規則化されたのは1960（昭和35）年2月のことである。利用サービスの拡張・充実のため、規則は改正が繰り返され現在に至っている。

閲覧業務は、発足当時に司書係、更に運用係、閲覧係、資料サービス係へと引き継がれ、閲覧担当を経て現在は利用サービス担当が行っている。

### 4 参考業務

参考業務は、1960（昭和35）年に参考係を新設しサービスを開始した。参考図書室を1964（昭和39）年9月に旧館1階応接室に設置したが、1973（昭和48）年の中央館移転後は、1階閲覧室カウンター近くに参考図書コーナーを設置し、そこに事典・辞書等を配架した。低書架を配置することで利用者の便宜を図っている。

1965（昭和40）年度より、新入生に対し「図書館利用の手引」（現在の「図書館利用案内」）を配布している。

また、データベース等の導入に伴う文献検索のためのガイダンス実施や学生からのいろいろな問い合わせに対するレファレンス業務も行っている。

参考業務は、参考係、電子サービス係を経て、現在は利用相談担当が行っている。

### 5 文献複写

1960（昭和35）年4月「熊本大学附属図書館文献複写取扱規則」の制定に伴い、文献複写サービスを開始した。当初はわずかに館内の需要を満たす程度であったが、次第に本学に所蔵していない資料を他大学から取り寄せるサービスが中心となった。1992（平成4）年より学術情報センター（現国立情報学研究所）のILLシステム（NACSIS-ILL）と接続し、利便性が高いサービスを提供している。

文献複写業務は、参考係、相互利用サービス係、相互協力担当を経て、現在は利用サービス担当が行っている。

---

## 第2項 図書館業務の電算化・電子図書館への対応

---

### 1 業務電算化の歩み

1992（平成4）年の『東光原：熊本大学附属図書館報』の創刊に伴い、当時の森野能昌学



長は「附属図書館報創刊にあたって」の文中で、「図書館は、大学における教育研究に不可欠なメディアとして、常に利用者との対話を通して的確にニーズを把握し、種々創意工夫をこらして、利用しやすい機能を備えることがもとめられております。」と述べている。

この言葉に先立つ1980年代は、情報化社会の幕開けとして大学図書館電算化の機運も全国的に高まりつつあった。これまでの手作業中心から、端末操作による仕事に変化したことは、図書館業務のサービス拡大と迅速な業務処理に多大な効果がもたらされた。

1980(昭和55)年の学術審議会の文部大臣答申「今後における学術情報システムの在り方について」を受けて、1983(昭和58)年「東京大学文献情報センター」設置、1986(昭和61)年の「学術情報センター(現国立情報学研究所)」の改組と続き、全国レベルでの学術情報システム構想の具体的整備が促進された。

本学でもキャンパス情報化への期待と要請が強まる中で、熊本大学情報処理センター構想に対する予算が、1986(昭和61)年度から措置された。また、図書館においても1987(昭和62)年の図書館業務電算化システムの本稼働へ向けて、情報処理センターと協力し準備が急速に進められた。

図書館内では、1986(昭和61)年4月に熊本大学附属図書館業務電算化委員会(以下「電算化委員会」)が発足し、そのもとでシステム設計連絡会議が開催された。また、電算化委員会の下部組織として実務担当であるシステム設計実施部会(第一部会:図書管理、第二部会:雑誌管理、第三部会:閲覧管理)が置かれ、体制の強化が図られた。

機種は、富士通FACOM M-360(情報処理センター設置・共用)に決定し、図書館に対しては大規模図書館パッケージソフト“ILIS”が導入された。

1987(昭和62)年4月に閲覧業務が最初に本稼働となり、6月には学術情報センターと接続し、目録システム(NACSIS-CAT)運用も開始した。更に、1992(平成4)年ILLシステム(NACSIS-ILL)も運用を開始した。学術情報センターを通じた全国の大学図書館との協力は、現在も継続拡充している。

1990(平成2)年には、情報処理センターに設置され共同利用であった汎用機に代えて、図書館専用としてFACOM M-340を導入した。

1997(平成9)年のシステム更新では、機能向上のために汎用機からUNIX対応“ILIS/X/WR”へ移行し、2003(平成15)年の更新では、NTTデータ九州“NALIS”へ移行した。膨大なデータ処理能力に加えて、新たな高度情報化時代の図書館システムへと変容を遂げている。

## 2 電算化による新たな業務

学術雑誌の発行形態も、従来の紙媒体を維持しつつ電子媒体での発行が主流となっている。いわゆる電子ジャーナルへの変化である。本学での電子ジャーナルサービスは、1997(平成9)年のEES(Elsevier Electronic Subscription)や学術情報センター「NACSIS-ELS」国内学協会電子ジャーナルの試験導入が最初である。1999(平成11)年度からは本格的に有料電子ジャーナルの利用も開始し、2001(平成13)年度には重点配分経費「電子的サービス拡充経費」の配分を受け、利用できるタイトル数は飛躍的に増加した。教育・研究に必要な不可欠となった電子ジャーナルではあるが、契約金額は毎年値上げされ、契約形態や経費の確保が今後の重要な課題となっている。



表2 電子ジャーナル契約タイトル数及び利用件数推移

年 度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
タイトル数	2,630	4,460	4,852	4,672	5,174	5,429	5,470	5,480
利用件数	111,183	192,050	241,963	277,683	329,542	311,518	359,964	377,932

利用件数は大手4社（Elsevier、Springer、Wiley、Blackwell）のものである。

論文等の情報検索については、その先駆けとして1980年代にDialogやJOISなど学術文献データベースの検索サービスを開始した。電子ジャーナルの急速な普及に伴い、2001（平成13）年、大学全体で利用する有料データベース整備も開始された。データベースの検索結果から、その論文が本学で契約している電子ジャーナルであれば、ダイレクトでフルテキストを読むことも可能である。現在、当然のように利用されているが、電子ジャーナルと同様、維持するための経費確保が今後の重大な課題である。

### 3 熊本大学学術リポジトリ

「熊本大学学術リポジトリ」（repository：原義は「貯蔵」「保管」。ここから「（知識の）宝庫」の意味を派生した）は、熊本大学の教育・研究活動から生み出された学術成果を収集し、デジタル形式で保存し公開している。2006（平成18）年3月に試験公開し、5月から正式運用を開始した。また、日本国内の大学等の機関リポジトリに収録されているデータを一括検索が可能な国立情報学研究所の機関リポジトリ・ポータルJAIROとも連携している。Google等の一般的な検索エンジンでも検索可能である。

学術リポジトリに登録された本学の研究成果は、研究者のみならず、広く一般市民や企業・公的機関へ公開され、学術情報が広く共有されることになった。本学の社会貢献の一助となっている。

表3 学術リポジトリの年度別コンテンツ数増加推移

年 度	2005	2006	2007	2008	2009
コンテンツ数	767	1,217	4,500	6,116	7,365

### 4 電子図書館の構築

近年のインターネットの普及やICT（情報通信技術）の発達に伴い、旧来の図書館と違い、インターネットでいつでもどこからでもアクセスできるという利点を活かした電子図書館の構築が進められている。図書館業務の電算化や図書・雑誌の電子化等により急速に発展しつつある。

本学図書館も前述のように電子ジャーナルやデータベースを導入し、更に電子ブックの導入も進めている。

電子図書館は、印刷物のデジタル形式への変換作業や管理に技術力のある職員の確保、オンラインアクセスの維持コスト（サーバ代等）、電子ジャーナル等のコンテンツ収集・確保等に係る経費の問題はあるものの、次のような利点があり、今後更に整備・充実させていくこととしている。

- ①利用者は図書館へ出向く必要がない。インターネットに接続できる環境があれば同じ

情報を得ることができる。

- ②昼夜を問わず、いつでも情報を得ることができる。
- ③たくさんの利用者が同時に同じ資料を使うことができる。
- ④蔵書検索が容易である。
- ⑤例えば、本の目次から読みたい章に直接アクセスするのが簡単にできる。
- ⑥従来の図書館では書籍の保管場所に限りがあるのに対し、電子図書館は遥かにたくさんの情報を保管することができる。
- ⑦ある電子図書館から別の電子図書館の資料へのリンクを提供するのが極めて容易である。資源共有のシームレスな統合が実現できる。
- ⑧従来の図書館では、職員の雇用や書籍のメンテナンス、貸出業務、蔵書の追加に莫大な費用を要するが、電子図書館は維持コストが低い。

---

### 第3項 利用者サービスの充実

---

#### 1 利用者サービスの展開

蔵書検索は、1991（平成3）年より情報処理センターの汎用機にて学内LAN対応のオンライン目録検索サービス（OPAC）を開始した。1995（平成7）年3月には、図書館内に設置したWSをサーバとするUNIX版OPACを公開し、更に翌年10月に図書館ウェブサイト公開と同時に、当時は全国的にも数少ないWWW版OPACのサービスを開始した。その後2000（平成12）年に、中央館所蔵資料の配架場所がわかるMAP機能を追加した。この熊本大学蔵書検索システム（OPAC）は、順調に利用件数を増加させてきたが、2007（平成19）年度の327,972件をピークに減少傾向となっている。今後に向けて新たなサービスの拡張が求められている。

表4 OPAC利用件数推移

年 度	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
利用件数	206,156	212,910	223,338	229,402	255,269	327,972	312,495	301,285

図書館ウェブサイトから利用者が申し込めるサービスは、①研究室サービス（図書購入等）、②学生図書購入希望、③ILL（図書館相互利用）、④レファレンス（質問や調査依頼）がある。最初に開始したオンラインサービスは、1998（平成10）年のILL申込である。2000（平成12）年に予算執行状況確認サービスを公開し、翌2001（平成13）年にさまざまなサービスを集めた研究室サービスの提供も開始した。2007（平成19）年には本学統合認証システム対応となり、より一層サービスの充実に努めている。

#### 2 利用者支援（情報リテラシー教育）

1999（平成11）年4月、学務情報システムSOSEKI稼働と同じ年に、新入生を対象としたパソコン実習を含む総合的ガイダンスを実施した。初の試みではあったが、新入生の半数近くに相当する900名が参加した。同年11～12月にかけては、レポート作成時の文献収集

に関するガイダンスも実施した。この図書館で企画・実施する利用者ガイダンスは、毎年内容を充実させつつ現在まで継続している。

また、2000（平成12）年には、前期の教養科目（総合科目）に「情報メディアとネットワークの活用」が附属図書館及び総合情報処理センターの協力のもとに開講され、特に演習は図書館職員が全面的に支援した。2004（平成16）年度の教養教育の全般的見直しにより、図書館の関わる授業は、基礎セミナー「図書館活用法」に引き継がれている。

図書館における情報リテラシー教育支援の取り組みは、図書館機能を総合的に向上させる自己啓発活動の1つとしても位置づけられるとともに、電子化時代に対応した質の高いサービスの実現にも役立つものである。

### 3 利用者サービスの充実

上述のように時代の変遷とともに学生などからの利用者ニーズも変わってきていることから、そのニーズに合ったサービスに努めている。今後も、電子ブックの増大などによりますます図書館資料の電子化が進むことが予想され、また、図書館システムの充実・発展も進むことが考えられる。

このような社会情勢の変化、大学における教育研究の変化などに速やかに対応し、更なる利用者サービスの充実に努める必要がある。

---

## 第4項 利用促進活動

---

### 1 文学賞の創設

大学生の日本語文章作成能力の低下が指摘されていること、また、全国的にも大学図書館の利用者が漸減状態にあることから、本学学生の読書への関心を大いに喚起し、文章作成能力の涵養を図ることを目的に、2008（平成20）年度に東光原文学賞を創設した。

当初は、分野を小説、応募資格を本学学生（大学院生、留学生を含む）とし、回を重ね安定してきたら分野を広げたり応募資格を拡大するなど見直しを行うこととしてスタートした。

初年度は、各学部・研究科から29編の応募があり、本学教員等3名の選考委員により、大賞1編及び優秀賞2編を選考した。その後、選考委員立会のもとに表彰式を行い、受賞作品は附属図書館報『東光原』及び附属図書館ホームページにより公開した。

2009（平成21）年度は20編の応募があり、前年度と同様に選考を行い、表彰（大賞1編、優秀賞3編）・公開を行った。

### 2 学生選書員による学習用図書の選書

2007（平成19）年度から、利用者ニーズに即した蔵書構成を推進し、図書館利用の促進を図るため、学生自身の視点で図書を選書することを目的として、学生選書員による学習用図書の選書を行っている。学生選書員は公募により募集しており、毎年十数名の応募がある。留学生の応募もあるが、まだ少数であるため今後の増加を期待したい。

この選書により、学生のニーズにより合った学習用図書の充実が図られ、好評を得てい

る。しかし、まだ選書員及び選書数とも少ない状況であるため、本制度の趣旨を広く周知することで、更なる拡充を望みたい。

### 3 ロビー展示

2007（平成19）年度から、学生の図書離れ防止及び図書貸出増加を目的とし、図書館若手職員によるロビーでの企画展示を行っている。

企画展示は、2～3ヵ月ごとにテーマを変えて実施しており、新入生向け、その時期（その年）に関連する話題、時事問題、環境問題など多岐にわたっている。

この催しにより、図書貸出も増えている。

---

## 第5項 学術資料調査研究推進室の活動

---

1998（平成10）年10月に公表された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の副題として「競争的環境の中で個性が輝く大学」が謳われており、熊本大学として、地域に根ざした大学としての特色ある教育・研究成果の収集・整理・保存及び発信に努めるため、特色のあるコレクションの創生を行うこととなった。

本学の特色のあるコレクション創生の対象としては、旧藩政資料、阿蘇家文書、旧制五高資料、水俣病研究資料等が挙げられる。これらの資料の収集から発信については、附属図書館単独はもとより個人や学部レベルの研究者だけでは不可能であることから、大学としての立場の研究者と附属図書館との密接な連携により実施することとなった。

これを受けて、1999（平成11）年10月に「学術資料調査研究推進室」が附属図書館に設置され、本学としてどのような教育・研究を行い、貢献したかが大学外から見える形でコレクションを収集・整理・保存し、発信することとなった。

同推進室では、「水俣病関係学術資料の整理収集」、「熊本大学が所蔵する古文書の分析・研究」及び「ラフカディオ・ハーンコレクションの研究」という3つのテーマのもとに調査研究が行われている。

それぞれのテーマに応じて学内教員を中心に室員を委嘱するとともに、テーマごとに造詣の深い人材を客員教授として配置している。

テーマごとの主な活動状況は以下の通りである。

#### ①水俣病関係学術資料の整理収集

- 1）水俣病関係学術資料の収集及び保存プロジェクト（1999～2002年度）
- 2）シンポジウム「問い続ける水俣・水俣病－水俣病事件50年を前にして－」開催（2004年度）
- 3）水俣病関係学術資料のホームページ公開（2006年度）

#### ②熊本大学が所蔵する古文書の分析・研究

- 1）永青文庫の「十九世紀熊本藩住民評価・褒賞記録「町在」解析目録」の分析・刊行（1999～2008年度）
- 2）同上のデータベース公開（2009年度）
- 3）永青文庫セミナー開催（2006～2009年度）

### ③ラフカディオ・ハーンコレクションの研究

- 1) ハーン主要著作物のデータベース化を分担（島根大学・富山大学・熊本大学による共同研究）（1999～2000年度）
- 2) ハーン資料の展示会、講演会、シンポジウム等の開催（2002～2009年度）
- 3) 学術資料調査研究成果の刊行（2005、2008年度）

---

## 第3節 図書館資料

---

### 第1項 蔵書の状況

---

附属図書館の全蔵書数は、1949（昭和24）年発足時の193,588冊から、2010（平成22）年3月現在では1,291,576冊と累増している（1949～2008年度の年度別蔵書数の推移は表8参照）。

2004（平成16）年の法人化以降は、研究室からの返却図書が増加しており、施設の狭隘化のため、重複図書等を除籍している。

---

### 第2項 貴重書及び特殊文庫資料

---

#### 1 保管状況

附属図書館では多くの貴重書及び特殊文庫資料を所蔵又は寄託を受け保管しており、いずれも貴重な教育研究資料である。現在保管しているものは以下の通りである。

##### ①阿蘇家文書

阿蘇神社宮司阿蘇惟友氏旧蔵の古文書、平安中期から江戸末期にわたり、中世文書は南朝関係のものが多く、社領支配の実態を解明するために貴重な史料である。一紙文書及び抄写の中世文書写しの分は「大日本古文書家わけ第十三」に収められている。中世文書は国指定重要文化財。1,047点、1961（昭和36）年購入。

##### ②松井文庫

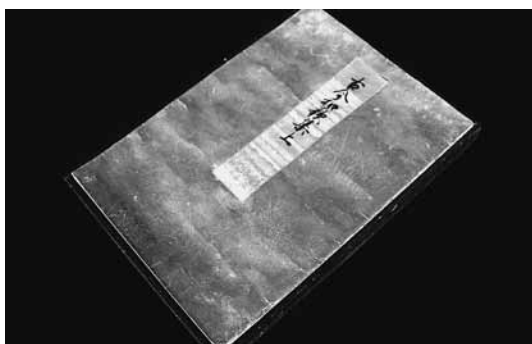
八代市の松井明之氏旧蔵の近世藩政資料及び典籍類である。代々細川家の城代家老として豊後統治時代から明治初年までの史料は、細川家の「北岡文庫文書」とあいまって熊本藩政研究上貴重なものである。37,221点、1957（昭和32）年購入及び1963（昭和38）年寄贈。

##### ③細川家北岡文庫

熊本藩主細川家に伝わる藩政史料及び写本類である。南北朝時代の細川頼之の代から1871（明治4）年の廃藩置県に至るまでの数百年にわたる膨大なもので、この中には近世細川氏の初代とされる藤孝の丹後統治時代のもの、豊前・豊後時代のもの、そして1632（寛永9）年の肥後入国以降のものが含まれている。本史料群はかつて細川家の旧北岡邸内の蔵に納められていたことから「細川家北岡文庫」と呼ばれており、公益財団法人永



阿蘇家文書



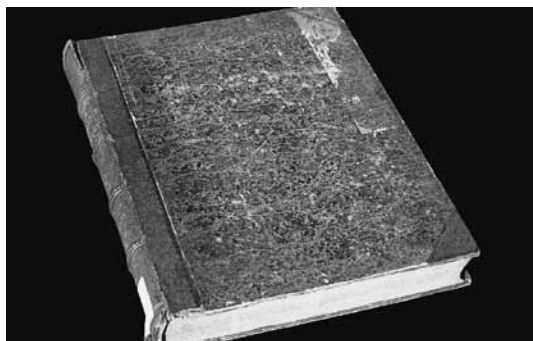
松井文庫



時習館文庫



八雲文庫



菅野文庫



柚原文庫



落合文庫



ポーター文庫

写真3 附属図書館所蔵貴重資料

青文庫が所有し、熊本大学が寄託を受け、附属図書館本館に架蔵している。藩政史料は言うに及ばず、国文学、有職故実等の文書は、その質・量ともに全国有数のものである。

43,867点、1964（昭和39）年寄託。

#### ④時習館文庫

時習館は第8代熊本藩主細川重賢によって1754（宝暦4）年熊本城二の丸に創立された藩校である。幕末には宋版『尚書正義』を刊行するなどの文化事業も行い、創立当初からかなりの図書が収集されたと思われるが、明治初年に閉鎖された際、その蔵本の多くは散逸してしまい、その一部が熊本師範学校に引き継がれ附属図書館に伝わった。漢籍は中国版を主にし和刻版も含むが、経、史、子、集にわたり、中でも史類が最も多い。3,101点、熊本師範学校より保管転換。

#### ⑤八雲文庫

1891（明治24）年11月から3年間、第五高等学校の英語とラテン語の教師であったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の作品、伝記、評論等である。32点、1951（昭和26）年購入。

#### ⑥徳永家文書

菊池市隈府（旧菊池郡隈府町）の御山支配役徳永家旧蔵の地方史料、主として山方取締りに関する史料（江戸中期～後期）である。143点、1951（昭和26）年寄贈。

#### ⑦菅野文庫

菅野は正氏旧蔵の蘭書であり、幕末から明治初年にかけて医者を目指して長崎に留学した際収集されたもので、航海、砲術、化学書等である。29点、1952（昭和27）年寄贈。

#### ⑧柚原文庫

第五高等学校出身の柚原益樹氏旧蔵の漢籍である。11年間の北京遊学の際収集した漢籍は万般にわたり、各種の基本図書が収蔵されているが、特に道家関係で「正統道蔵」「道蔵輯要」「道蔵全書」などは、後年台湾で復刻されるまでは極めて入手困難な道蔵研究の根幹をなすものであった。2,943点、1957（昭和32）年購入。

#### ⑨落合文庫

第五高等学校教授、のち宮内省に入り大正天皇の侍従となった落合為誠（東郭）氏旧蔵の漢籍及び国書である。氏は明治、大正、昭和にかけての日本有数の漢詩人であったことから蔵本も漢詩文が中心になっているが、経、史類はじめ系統的な集書がなされている。東京大学東洋学文献センターによる調査報告書（油印）が刊行されている。3,501点、1957（昭和32）年熊本大学期成会より寄贈。

#### ⑩ポーター文庫

1916（大正5）年10月から1922（大正11）年2月まで第五高等学校の英語教師であったウィリアム・N・ポーターの第五高等学校在職中の蔵書の一部である。35点、1960（昭和35）年寄贈。

#### ⑪藤本家文書

玉名郡長洲町腹赤の村役人（庄屋）を務めた藤本家旧蔵の村方史料（主として幕末～明治初期）である。中に明治初期の大浜港関係文書を含んでいる。416点、1960（昭和35）年寄託。



## ⑫平野文庫

第五高等学校卒業生平野芳邦氏（東京大学文学部東洋史学科在学中出征戦死）の記念に父芳州氏よりその蔵書を寄贈されたものである。宋・元・明の経済史関係の漢籍類である。307点、1962（昭和37）年寄贈。

## ⑬井上文庫

井上信一氏旧蔵の漢籍、国書及び近世史料である。井上家は幕末熊本藩の勘定奉行であった。当時の家老クラスの教養を示す史料として興味深いものである。1,749点、1963（昭和38）年寄贈。

## ⑭井手家文書

熊本市中島町の地方役人（惣庄屋、庄屋）を務めた井手家旧蔵の村方史料（近世中期～後期）である。都市近郊農村史料として優れたものである。760点、1965（昭和40）年購入。

## ⑮河端家文書

上益城郡益城町砥川の村役人（庄屋）を務めた河端家旧蔵の土地関係文書（主として江戸後期～末期）である。110点、1967（昭和42）年購入。

## ⑯西園寺家文書

上益城郡益城町砥川の村役人（庄屋）を務めた西園寺家旧蔵の村方史料（江戸中期～明治初期）である。206点、1967（昭和42）年購入。

## ⑰栗林文書

阿蘇市宮地の地方史料。228点、1992（平成4）年栗林淑氏より寄贈。

## ⑱米田家文書

熊本藩第二家老米田家の近世初期から幕末期にかけての文書群。654点、1997（平成9）年購入。

## ⑲仲光家文庫

旧熊本藩士であった仲光家に伝わった古文書及び典籍類。382点、2007（平成19）年山下（旧姓仲光）一恵氏より寄贈。

## ⑳横井小楠文書

幕末維新期の思想家・政治家である横井小楠に関する古文書・古記録類。276点、2007（平成19）年横井和子氏より寄託。

## 2 貴重資料展

附属図書館では、地域への文化貢献の1つとして、1984（昭和59）年から毎年、秋の学園祭の時期に合わせて資料展及び講演会を開催している。第1回（1984年）から第17回（2000年）までは「特殊資料展」として、第18回（2001年）からは「貴重資料展」として、回を重ねている。各回の展示テーマは表5の通りである。

表5 貴重資料展テーマ一覧（1984～2009年）

回	開催年	テーマ名
第1回	1984年	永青文庫史料にみる細川氏の入国
第2回	1985年	細川重賢没後二百年記念
第3回	1986年	細川幽斎関係文学書

回	開催年	テーマ名
第4回	1987年	阿蘇家文書
第5回	1988年	永青文庫史料による熊本城図展
第6回	1989年	永青文庫史料による近世熊本の町の生活
第7回	1990年	細川家のローマ字印
第8回	1991年	『太平記』の世界
第9回	1992年	信長と幽斎
第10回	1993年	細川重賢の文事
第11回	1994年	肥後の博物学
第12回	1995年	『永青文庫』の文学書
第13回	1996年	絵図で見る細川氏の領国支配
第14回	1997年	阿蘇家文書に見る肥後の南北朝
第15回	1998年	細川家資料にみる近代法への歩み
第16回	1999年	天草・島原の乱
第17回	2000年	永青文庫による細川家(藩)の大名屋敷
第18回	2001年	中世阿蘇社の世界
第19回	2002年	永青文庫の中の「明治維新」
第20回	2003年	宝暦の改革と細川重賢
第21回	2004年	肥後の乱世－中世・近世熊本地域の戦争と平和－
第22回	2005年	古今和歌集 その豊穡の世界
第23回	2006年	阿蘇家文書修復完成記念 阿蘇の文化遺産展
第24回	2007年	近代への階梯－熊本教育史の一断面－
第25回	2008年	源氏物語千年の時
第26回	2009年	新しい横井小楠像の構築を目指して

### 3 重要文化財の指定と修復

附属図書館所蔵「阿蘇家文書」のうち、中世文書34巻(304通)と写本36冊が、1987(昭和62)年6月6日、国の重要文化財に指定された。指定を機に、附属図書館では巻物34巻の修復作業に取り組み、特別の予算措置により毎年京都の専門業者に2～3巻ずつ修復を依頼し、18年の歳月をかけ2005(平成17)年度に修復が完成した。完成翌年度の2006(平成18)年9～10月には、第23回貴重資料展を「阿蘇家文書修復完成記念 阿蘇の文化遺産」として、熊本県立美術館との共催で熊本県立美術館を会場として開催した。この資料展は「阿蘇家文書」全巻を展示する貴重な機会となり、同時に、全点を載せた図録も刊行し好評を博した。

そのほか、沖縄の風俗を描いた「沖縄風俗絵巻」(1巻)も表装の痛みが激しかったため、2007(平成19)年に修復した。

### 4 古文書勉強会の活動

附属図書館では、古文書資料業務の人材育成を目的に1985(昭和60)年より、当時、図書館専門員であった川口恭子氏(現永青文庫研究センター特任教授)を指導者として、図書館職員有志による古文書勉強会を現在まで継続して行っている。会員数は異動等で変動は

あるが、十数名である。勉強会は大学の休業期を除き、月2回、勤務終了後に実施している。開始当初は古文書特有の「くずし字」の読みからスタートし、徐々に図書館で所蔵している古文書資料の翻刻や目録作業へと発展してきた。2005（平成17）年からは、松井文庫「冊子体文書」の新しい目録作成に取り組み、2008（平成20）年2月に「松井文庫冊子体目録」として図書館ホームページで公開した（この作業の詳細については、図書館報『東光原』No.51参照）。現在は、引き続き、松井文庫「一紙文書」の翻刻と目録調査票作成作業を行っている。このほかの勉強会の成果として、熊本藩の藩校であった時習館に関する資料『学校方格帳』（細川家北岡文庫資料）の翻刻を、2008（平成20）年10月から熊本大学学術リポジトリ上で公開している。

## 5 その他

2008（平成20）年4月には、熊本県立美術館に「永青文庫展示室」が開室し、「細川家北岡文庫（＝永青文庫）」の資料を出品展示する機会も増えている。また、2009（平成21）年4月には、「細川家北岡文庫」の研究拠点として、文学部附属永青文庫研究センターが設立され、詳細な目録作成のための調査作業も始まっている。

---

## 第3項 図書館資料の運用

---

中央館における図書館資料の貸出冊数については表6の通りである。1949（昭和24）年の開館以降、年を追うごとに概ね増大している。特に1955（昭和30）年度と1975（昭和50）年度を比べると3倍以上に増加している。これは1973（昭和48）年度に現在の中央館が開館し、利用環境と資料が充実したことがその差に顕われている。また、1985（昭和60）年度の貸出冊数は1975（昭和50）年度と比べて2倍近くに増えている。これは、1978（昭和53）年度より時間外開館を開始して利用時間を拡大したこと、1984（昭和59）年度にブックデテクションシステム（無断持出し防止システム）を導入したことにより、ロッカーに預けることなく荷物を持ったまま自由に入館できるようになったことで、利便性が増したことによるものである。更に、1991（平成3）年度に学内LANに対応したオンライン目録検索サービス（OPAC）が開始され、直接来館しての検索だけではなく、時間と場所を問わず検索が容易になったことから、1992（平成4）年度の貸出冊数が前年度に比べて飛躍的に増加した。

中央館では、地域社会への貢献の観点から1991（平成3）年度より一般市民への開放を開始し、閲覧及び複写に供してきた。更に試行を経た2000（平成12）年度からは、貸出も行っている。利用状況は表7の通りであるが、常に一定の利用者があり、特に休日・夜間に利用が多くなることから地域への貢献に役割を果たしており、今後も継続していく必要がある。

開館日については、中央館では以前より土曜開館を行ってきたが、1996（平成8）年より日曜日・祝日開館を開始し、1999（平成11）年度には夏季休業中の土日も開館するなど、現在では年間のうち9割以上の日数で開館している。時間外の開館時間についても、1978（昭和53）年度より通年で開始した。その時間も徐々に長くなり、現在では、朝は8時40分

から夜間は22時まで、土・日・祝日は12時から18時まで開館している。

図書館システムが電算化されたことに伴い、貸出方法も、従来の図書カードに手で記入していた方法から、利用者カードの番号や図書IDを機械で読み取る方法になり、処理が早く済むようになった。また、自動貸出装置の導入により利用者自身で貸出手続きができるようになり、利用者にとって更に便利になっている。この方向は今後とも続くと思われる。

中央館では、入館者の入退館管理を適切に行うため、2002（平成14）年度にカード式入退館システムを導入した、利用者にとっては多少不便に感じられる点はあると思うが、それまで記入式であったため実数が把握できなかった学外者の入館者数が、延べ人数とはいえ全入館者数の5%以上を占めていることが判明したことは興味深い。

中央館では、1997（平成9）年度より4度にわたる地下書庫の電動書架の設置や2006（平成18）年度の南棟の増築により、蔵書を並べる書架を増やしているが、毎年増加する資料数に追いついていない状況である。

また、利用者の資料の利用についても、インターネットの普及により、従来の紙媒体での利用に加え電子ジャーナルやデータベースなど電子媒体の利用も大変多く、2007（平成19）年度に89台の利用者用パソコンが設置されたパソコンコーナーは常に高い利用率を保っている。資料媒体の変化も今後の推移が注目されるところである。

医学系分館の貸出状況は表6の通りである。医学系分館の特徴として、図書よりも雑誌の利用が中心であることが挙げられる。貸出冊数は1975（昭和50）年度の改築時に一時的に減っているが、その後は順調に増えていた。しかし、1989（平成元）年度をピークに減少に転じ、1997（平成9）年度以降はピーク時の3分の1ほどで推移している。これには、医学系分館のある本荘地区の再開発に伴い、教育・研究の場所と医学系分館が物理的に遠距離となったこと、更にインターネットの普及や表2の電子ジャーナル契約タイトル数及び利用件数推移に見られるように、研究者が必要な情報を直接入手できるようになったことなどが原因として考えられる。

開館時間については、1978（昭和53）年度以降、平日・土曜日、更に休日へと時間外開館が延長され、現在は長期休業中を除き、平日は9時から21時まで、土・日・祝日は12時から18時まで開館している。また、1995（平成7）年度より登録制による教職員・院生への24時間開館を実施し、多忙な医療関係者に利用されている。

薬学部分館は、1988（昭和63）年度に独立棟として竣工されたことにより、入館者数がそれまでの2倍以上に増加した。以降も増加していたが、1998（平成10）年度を境に減少し始め、近年は5万人強の水準となっている。これもインターネットの普及及び情報媒体の変化によるものと解される。貸出冊数は少ないが、入館者数はそれに比して多く、館内利用が中心となっている。

開館時間も、特に1991（平成3）年度の時間外開館時間延長以降も拡大され、現在では医学系分館と同様の開館時間となった。また、1997（平成9）年度より24時間開館を実施しているが、薬学部分館では、教職員・院生に加え、学部4年生以上にも利用を許可しており、学生の勉学に役立っている。

表6 貸出統計(冊数)

年度	中央館			医学系分館		薬学部分館		計		
	学生	教職員	一般	学生	教職員	学生	教職員	学生	教職員	一般
1955	5,351	1,866		0	5,839	1,352	1,003	6,703	8,708	
1960	11,577	1,359		0	3,220	581	195	12,158	4,774	
1965	7,773	813		255	4,954	556	866	8,584	6,633	
1970	5,528	930		1,230	3,930	2,290	156	9,048	5,016	
1975	16,663	613		419	1,949	386	132	17,468	2,694	
1980	16,232	937		1,632	3,149	352	155	18,216	4,241	
1985	32,450	975		6,653	14,621	261	57	39,364	15,653	
1990	35,115	1,228		7,792	10,811	666	119	43,573	12,158	
1995	56,155	2,696		5,624	3,654	1,336	137	63,115	6,487	
2000	46,985	1,527	1,587	4,685	2,217	927	208	52,597	3,952	1,587
2005	52,210	2,517	2,935	4,131	549	989	204	57,330	3,270	2,935
2009	50,637	3,174	3,481	5,877	599	1,144	151	57,658	3,924	3,481

表7 入館統計(人数)

年度	中央館		医学系分館		薬学部分館		計	
	学生・教職員	学外者	学生・教職員	学外者	学生・教職員	学外者	学生・教職員	学外者
1986	346,250	899	64,948	531	16,298	154	427,496	1,584
1990	301,813	352	115,314	449	60,985	188	478,112	989
1995	404,912	857	118,764	118	86,831	114	610,507	1,089
2000	450,763	2,024	153,216	311	101,851	109	705,830	2,444
2005	315,634	14,203	126,269	431	53,744	92	495,647	14,726
2009	352,011	24,571	108,382	531	55,019	52	515,412	25,154

## 第4節 将来への展望

附属図書館は、「熊本大学の理念に基づき、教育と研究活動を支える学術情報基盤としての不可欠な資料を収集・保管し、学内外の利用者に対して、効果的に提供することを目指す」という理念のもと、教育支援、学習支援、研究支援、社会連携、国際化、情報発信のそれぞれに目標・計画を掲げ、その達成に向けて努力しているところである。

近年のインターネットの普及やICT(情報通信技術)の発達に伴い、電子図書館の構築など図書館の高度情報化のニーズが高まっている。そのため、電子ジャーナル・電子ブック・データベース等の電子コンテンツの整備やその利用ガイダンスの充実を図ることとしている。

また、学生や社会人の多様な学習ニーズに対応するためには、大学図書館の新たな機能として、静謐な個別の学習空間だけでなく、グループでデジタル情報と紙情報をシーム

レスに使い、種々のサポートも受けられる新しい学習空間をも作る必要性が認識されるようになってきた。このことから、教科書と参考書だけで個別に学習するのではなく、大量のデジタル情報をも駆使し、創造的な考える力をつけるような学習支援の場（ラーニング・コモンズ）の設置を計画している。

そのほか、地域への情報提供と知的・文化的サービスを一層充実させるため、本学が所蔵し又は寄託された貴重資料（附属図書館保管のもの）について、電子化及びその公開を進めるとともに、他機関等との連携を図りながら、貴重資料展等を更に充実させて実施していくこととしている。また、本学の教育研究成果を収集・保存し、学内外へ発信していくシステムである「学術リポジトリ」の拡充も進めていくこととしている。

更に、留学生増に伴う国際化に必要な環境整備や社会に開かれた図書館として、積極的な情報発信を行うこととしている。

このように、附属図書館は大学の学術情報基盤として、学生及び教職員はもとより社会からのニーズに応えるため、大学や社会の変化に対応して、その使命達成を目指すものである。

表 8 年度別蔵書数の推移（館別、1949～2008年度）

年度	中央館		医学系分館		薬学部分館		工学部分室		教育学部分館		小 計		合 計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
1949	50,561	18,819	16,241	19,842	6,412	4,756	18,836	17,238	36,980	3,903	129,030	64,558	193,588
1950	52,302	19,852	17,017	20,039	6,715	4,762	19,485	17,270	38,807	3,921	134,326	65,844	200,170
1951	55,358	21,519	17,864	20,278	6,819	4,828	20,056	17,685	40,278	4,040	140,375	68,350	208,725
1952	57,324	23,778	18,754	20,622	6,885	4,881	20,633	17,880	42,252	4,378	145,848	71,539	217,387
1953	58,641	25,614	20,390	20,824	6,869	4,917	20,894	18,076	44,732	5,049	151,526	74,480	226,006
1954	60,401	27,157	21,038	21,548	6,904	4,950	21,727	18,349	46,543	6,024	156,613	78,028	234,641
1955	61,991	28,545	21,560	22,003	6,933	4,963	22,283	18,578	48,118	6,403	160,885	80,492	241,377
1956	108,757	30,489	22,268	22,405	6,950	5,366	22,979	18,851	49,566	6,836	210,520	83,947	294,467
1957	112,610	31,699	23,720	22,823	7,028	5,385	23,827	19,148	51,185	7,461	218,370	86,516	304,886
1958	116,586	34,053	24,365	23,659	7,102	5,523	24,612	19,406	52,930	7,856	225,595	90,497	316,092
1959	118,803	36,447	25,950	24,685	7,253	5,641	25,457	19,786	54,283	8,355	231,746	94,914	326,660
1960	178,116	47,401	27,505	25,591	7,358	5,667	26,150	19,996			239,129	98,655	337,784
1961	183,423	50,077	29,400	27,276	7,481	5,903	27,414	20,649			247,718	103,905	351,623
1962	187,393	52,645	30,646	28,139	7,615	6,046	28,179	20,903			253,833	107,733	361,566
1963	194,609	55,426	31,841	29,716	7,855	6,187	30,404	21,396			264,709	112,725	377,434
1964	201,201	58,147	33,671	31,222	8,007	6,262	31,472	21,764			274,351	117,395	391,746
1965	205,821	61,030	35,706	32,727	8,183	6,421	33,273	22,625			282,983	122,803	405,786
1966	216,552	66,353	37,374	34,418	8,374	6,552	35,427	23,550			297,727	130,873	428,600
1967	228,756	70,328	39,332	36,084	8,606	6,725	38,267	24,523			314,961	137,660	452,621
1968	235,766	74,477	41,214	38,595	8,799	7,008	40,960	25,874			326,739	145,954	472,693
1969	242,225	78,415	42,658	39,985	9,110	7,305	43,256	26,814			337,249	152,519	489,768
1970	253,055	83,162	44,533	42,094	9,264	7,632	45,777	28,133			352,629	161,021	513,650
1971	261,540	88,716	46,305	44,021	9,363	7,847	47,939	29,059			365,147	169,643	534,790
1972	270,280	93,700	47,848	45,655	9,677	8,253	50,372	30,324			378,177	177,932	556,109
1973	278,879	98,388	49,497	47,939	10,106	8,640	52,222	31,287			390,704	186,254	576,958

年度	中央館		医学系分館		薬学部分館		工学部分室		教育学部分館		小 計		合 計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
1974	287,346	104,050	51,814	49,797	10,241	8,925	53,597	32,493			402,998	195,265	598,263
1975	296,305	108,649	53,259	52,071	10,412	9,301	55,211	33,955			415,187	203,976	619,163
1976	305,835	113,041	54,656	54,051	10,585	9,590	56,760	34,851			427,836	211,533	639,369
1977	317,545	118,629	56,760	56,225	10,685	9,804	58,226	36,377			443,216	221,035	664,251
1978	330,249	125,573	56,744	57,717	10,986	10,129	59,766	37,784			457,745	231,203	688,948
1979	345,529	132,822	54,123	60,553	11,173	10,534	61,014	39,361			471,839	243,270	715,109
1980	359,591	142,548	52,778	62,503	11,353	10,946	63,518	40,447			487,240	256,444	743,684
1981	376,052	150,461	54,130	64,667	11,560	11,310	65,980	41,617			507,722	268,055	775,777
1982	392,319	159,506	54,823	66,626	11,760	11,766	68,814	42,930			527,716	280,828	808,544
1983	407,507	167,584	55,988	69,274	11,908	12,137	71,315	44,183			546,718	293,178	839,896
1984	422,377	175,616	57,305	71,367	12,092	12,478	73,480	45,503			565,254	304,964	870,218
1985	435,578	182,901	58,148	73,205	12,206	12,844	75,070	46,853			581,002	315,803	896,805
1986	450,449	191,077	58,616	74,689	12,445	13,209	76,937	48,034			598,447	327,009	925,456
1987	465,698	198,893	59,804	76,589	12,645	13,544	78,949	49,320			617,096	338,346	955,442
1988	482,530	210,965	60,634	78,834	12,889	13,907	80,826	50,665			636,879	354,371	991,250
1989	495,914	218,669	61,878	80,834	13,119	14,299	82,755	51,815			653,666	365,617	1,019,283
1990	508,452	224,933	62,932	82,742	13,345	15,127	84,484	52,891			669,213	375,693	1,044,906
1991	606,155	285,838	64,659	84,482	13,681	15,547					684,495	385,867	1,070,362
1992	619,080	291,135	65,658	86,475	13,906	15,987					698,644	393,597	1,092,241
1993	631,564	297,824	66,621	88,483	14,151	16,378					712,336	402,685	1,115,021
1994	642,596	306,444	67,521	90,095	14,526	17,023					724,643	413,562	1,138,205
1995	653,622	312,839	68,236	91,857	14,769	17,577					736,627	422,273	1,158,900
1996	663,478	317,403	68,763	93,700	14,837	18,077					747,078	429,180	1,176,258
1997	673,648	322,765	69,664	95,650	14,956	18,585					758,268	437,000	1,195,268
1998	682,967	327,855	70,485	97,148	15,085	19,098					768,537	444,101	1,212,638
1999	688,052	332,658	69,788	99,692	15,212	19,505					773,052	451,855	1,224,907
2000	696,147	337,140	70,618	101,297	15,426	20,160					782,191	458,597	1,240,788
2001	703,855	340,470	70,775	102,786	15,677	20,622					790,307	463,878	1,254,185
2002	708,428	343,529	69,485	101,784	15,801	20,936					793,714	466,249	1,259,963
2003	714,379	346,004	69,647	103,004	15,806	21,176					799,832	470,184	1,270,016
2004	718,717	349,329	71,151	105,070	15,893	21,466					805,761	475,865	1,281,626
2005	721,350	352,049	71,544	106,310	15,929	21,783					808,823	480,142	1,288,965
2006	724,536	353,980	72,125	107,453	16,057	22,165					812,718	483,598	1,296,316
2007	727,172	356,429	72,212	108,412	16,034	22,246					815,418	487,087	1,302,505
2008	719,625	356,168	72,043	109,324	16,035	22,602					807,703	488,094	1,295,797



表9 附属図書館歴代館長・分館長・分室長一覧

館 長	医学部（系）分館長	薬学部分館長	教育学部分館長	工学部分（館）室長
初 原田 敏明 1950年2月21日～1951年5月31日	初 佐々木宗一 1949年7月31日～1950年3月23日	初 野々村 進 1950年6月26日～1951年7月31日	初 瀬古 確 1950年6月26日～1952年6月6日	初 向井参之充 1950年6月26日～1952年6月6日
2 小山 準二 1951年6月1日～1953年7月31日	2 尾崎 正道 1950年3月24日～1957年11月30日	2 岡野 定輔 1951年8月1日～1953年6月30日	2 水野 武夫 1952年6月7日～1960年6月6日 (1960年6月廃館)	2 堀田 秀次 1952年6月7日～1954年6月6日
3 松本 唯一 1953年8月1日～1955年7月31日		3 小山 鷹二 1953年7月1日～1959年6月30日		3 竹井 素行 1954年6月7日～1958年6月6日
4 原田 敏明 1955年8月1日～1957年7月31日	3 忽那 将愛 1957年12月1日～1961年3月31日			4 清田 堅吉 1958年6月7日～1962年6月6日
5 石坂 正蔵 1957年8月1日～1961年7月31日		4 占部 則明 1959年7月1日～1963年3月31日		
6 大久保武男 1961年8月1日～1965年7月31日	4 入鹿山且朗 1961年4月1日～1967年3月31日	5 村田 敏郎 1963年4月1日～1964年6月30日		5 堀 一夫 1962年6月7日～1968年6月6日
7 村上 唯雄 1965年8月1日～1967年7月31日		6 占部 則明 1964年7月1日～1966年3月31日		
8 松本 雅明 1967年8月1日～1969年4月30日	5 田中 正三 1967年4月1日～1971年3月31日	7 加瀬 佳年 1966年4月1日～1971年5月15日		6 兼重 修 1968年6月7日～1970年6月6日
9 福井 武弘 1969年5月1日～1971年3月31日				

館 長	医学部（系）分館長	薬学部分館長	教育学部分館長	工学部分（館）室長
10 黒田 正巳（事務取扱） 1971年4月1日～1971年5月15日 11 加瀬 佳年 1971年5月16日～1975年5月15日  12 内田 楨男 1975年5月16日～1977年5月15日  13 岩本 政教 1977年5月16日～1979年5月15日  14 一番ヶ瀬尚 1979年5月16日～1981年5月15日 15 工藤 敬一 1981年5月16日～1985年5月15日  16 荒木 尚 1985年5月16日～1987年5月15日  17 安河内一夫 1987年5月16日～1989年5月15日 18 児島 昭次 1989年5月16日～1991年5月15日 19 黒羽 啓明 1991年5月16日～1993年5月15日	6 武内 忠男 1971年4月1日～1973年3月31日  7 内田 楨男 1973年4月1日～1975年5月15日 8 藤本十四秋 1975年5月16日～1981年3月31日  9 三浦 創 1981年4月1日～1987年3月31日  10 吉永 秀 1987年4月1日～1995年3月31日	8 柴田 元雄 1971年5月16日～1975年5月15日  9 米田 文郎 1975年5月16日～1979年5月15日  10 児島 昭次 1979年5月16日～1983年3月31日  11 合屋周次郎 1983年4月1日～1987年3月31日  12 古川 潮 1987年4月1日～1991年3月31日  13 國枝 武久 1991年4月1日～1993年3月31日		7 立川 逸郎 1970年6月7日～1972年6月6日  8 桃崎順二郎 1972年6月7日～1976年6月6日  9 川崎 頼雄 1976年6月7日～1978年6月6日  10 安河内一夫 1978年6月7日～1984年3月31日  11 上野 文男 1984年4月1日～1986年3月31日  12 安河内一夫 1986年4月1日～1987年5月15日 13 右田 健兒 1987年5月16日～1989年3月31日 14 平井 一男 1989年4月1日～1995年3月31日

館 長	医学部（系）分館長	薬学部分館長	教育学部分館長	工学部分（館）室長
20 植村啓治郎 1993年5月16日～1995年5月15日	11 小川 尚 1995年4月1日～2005年3月31日	14 宮田 健 1993年4月1日～1997年3月31日		15 松尾日出男 1995年4月1日～1998年3月31日
21 金原 理 1995年5月16日～1999年5月15日		15 原野 一誠 1997年4月1日～2003年3月31日		
22 平山 忠一 1999年5月16日～2003年3月31日		16 後藤 正文 2003年4月1日～2004年3月31日		
23 岩岡 中正 2003年4月1日～2005年3月31日		17 中山 仁 2004年4月1日～2005年3月31日		
24 中山 仁 2005年4月1日～2007年3月31日	12 三浦 洵 2005年4月1日～2007年3月31日	18 大塚 雅巳 2005年4月1日～2008年3月31日		
25 田口 宏昭 2007年4月1日～2009年3月31日	13 宇宿功市郎 2007年4月1日～	19 中島 誠 2008年4月1日～		
26 入口 紀男 2009年4月1日～				

表10 附属図書館歴代事務長・事務部長等一覧

事務長	事務部長	学術研究協力部長	学術情報総主幹	学術情報部長
倉岡 堯昌 1949年7月1日～1951年3月31日				
吉川 尚 1951年4月1日～1964年3月31日				
小山 恵章 1964年4月1日～1967年3月31日				
坂本 龍蔵 1967年4月1日～1973年4月1日				
千羽 親晴 1973年4月1日～1974年6月6日				

事務長	事務部長	学術研究協力部長	学術情報総主幹	学術情報部長
山口 正人 1974年6月7日～1978年3月31日 葉室 森男 1978年4月1日～1979年3月31日	河野 繁蔵 1979年4月1日～1982年3月31日 砂本 眞 1982年4月1日～1985年3月31日 相良 侯秀 1985年4月1日～1988年3月31日 金井 孝 1988年4月1日～1990年3月31日 竹熊 竹久 1990年4月1日～1992年3月31日 古閑 義信 1992年4月1日～1995年3月31日 青山 弘 1995年4月1日～1997年3月31日 福原 勇一郎 1997年4月1日～1998年12月31日 山下 谷治 1999年1月1日～2002年3月31日 高塩 勝也 2002年4月1日～2004年3月31日	高塩 勝也 2004年4月1日～2004年4月13日 東 雅彦 2004年7月1日～2006年6月30日	松藤 典生 2006年7月1日～2008年3月31日	梅原 眞一 2008年4月1日～2010年3月31日 島田 正俊 2010年4月1日～

表11 附属図書館歴代課長一覧

整理課長	閲覧課長	情報管理課長	情報サービス課長	学術情報課長	図書館サービス課長	図書課長
葉室 森男 1979年4月1日～1983年4月1日	大宅 敏之 1979年4月1日～1983年4月1日					
重松 多喜造 1983年4月1日～1987年3月31日	福岡 廣 1983年4月1日～1988年3月31日					
繰田 智晴 1987年4月1日～1988年3月31日						
		繰田 智晴 1988年4月1日～1989年3月31日	外村 弘臣 1988年4月1日～1989年3月31日			
		外村 弘臣 1989年4月1日～1991年3月31日	田村 智 1989年4月1日～1991年3月31日			
		田尻 英雄 1991年4月1日～1994年3月31日	二宮 純恭 1991年4月1日～1993年4月30日			
		石井 保廣 1994年4月1日～1996年3月31日	矢野 正博 1993年5月1日～1996年3月31日			
		小川 正明 1996年4月1日～1998年3月31日	山根 文夫 1996年4月1日～1998年9月30日			
		高塩 勝也 1998年4月1日～2000年3月31日	濱崎 修一 1998年10月1日～2002年3月31日			
		森松 睦雄 2000年4月1日～2003年3月31日	加藤 信哉 2002年4月1日～2004年3月31日			
		蓑原 和秀 2003年4月1日～2003年11月30日				
		松藤 典生 2003年12月1日～2004年3月31日				
				松藤 典生 2004年4月1日～2006年6月30日	柿本 義行 2004年4月1日～2006年6月30日	
						柿本 義行 2006年7月1日～2007年3月31日
						島田 正俊 2007年4月1日～2008年3月31日
						永田 正次 2008年4月1日～

表12 附属図書館歴代係・担当一覧

年 月	中央館	医学系(部)分館	薬学部分館	工学部分室(館)	教育学部分館
1949年 5月	庶務係、会計係、司書係	図書係	図書係	図書係	図書係
1954年 9月	管理係、整理係、運用係	図書係	図書係	図書係	図書係
1960年 6月	管理係、整理係、閲覧係、参考係	図書係	図書係	工学部分室 図書係	中央館に統合
1963年 5月	総務係、受入係、目録係、閲覧係、参考係	整理係、 運用係	図書係	工学部分室 図書係	
1979年 4月	整理課：総務係、受入係、目録係 閲覧課：閲覧係、参考係、学術雑誌係	図書係	図書係	工学部分室 図書係廃止	
1984年 1月	専門員 整理課：総務係、受入係、目録係 閲覧課：閲覧係、参考係、学術雑誌係	図書係	図書係		
1988年 4月	専門員 情報管理課：総務係、受入係、目録係 情報サービス課：閲覧係、参考係、学術雑誌係	図書係	図書係		
1997年 4月	専門員 情報管理課：総務係、図書情報係、雑誌情報係、 電子情報係 情報サービス課：資料サービス係、電子サービス係、 相互利用サービス係	医学情報サー ビス係	薬学情報サー ビス係		
2004年 4月	学術情報課：学術情報企画係、図書情報係、 雑誌情報係、電子情報係 図書館サービス課：副課長、資料サービス係、 電子サービス係、 相互利用サービス係	医学情報サー ビス係	薬学情報サー ビス係		
2006年 7月	図書課：副課長(総務管理担当)、 副課長(サービス担当)、総務担当、 図書担当、雑誌担当、閲覧担当、 電子情報担当、相互協力担当、利用相談担当	医学系分館 担当	薬学部分館 担当		
2008年 4月	図書課：副課長(総務管理担当)、 副課長(サービス担当)、総務担当、 図書担当、雑誌担当、利用サービス担当、 電子情報担当、利用相談担当	医学系分館 担当	薬学部分館 担当		